

# 19 太平記・梅松論からみた「箱根・竹之下の戦い」

～どちらの史料が正確か？～

## 1 尊氏の離反

1335（建武2）年8月、北条高時の遺児時行が起こした中先代の乱を鎮圧した足利尊氏は、鎌倉を奪還した。この報を受けた後醍醐天皇は尊氏を従二位に上げ、帰京命令を出した。しかし、尊氏はこれには従わず鎌倉にとどまり、反後醍醐の意思を鮮明にしたのである。11月、尊氏追討の命を受けた新田義貞が尊良親王を奉じて京都を出立した。東進する新田軍は各地で足利軍を破り、関東への出入口である駿豆国境付近に陣を取った。ここに至ってようやく尊氏も出陣し、やがて箱根・竹之下（小山町）の戦いが開始されるのである。この合戦の様子は『太平記』や『梅松論』に詳しい。

## 2 太平記と梅松論

『太平記』は後醍醐天皇の倒幕計画に始まり、1368（応安元）年の足利義満の3代将軍就任の頃までを南朝の立場から描いた軍記物語である。これに対し『梅松論』は、承久の乱から始まり、正中・元弘の変、南北朝の動乱を述べ、新田義貞の金崎城落城までを足利方の立場から描いている。

〈表1〉 太平記と梅松論の記載の違い

1335年	太平記	梅松論
11/20	直義軍、鎌倉出発（11/24、三河国矢矯の東宿着。翌日、新田軍に敗れる）	
12/2		直義軍、鎌倉出発
12/5	手越河原の合戦。直義軍、鎌倉まで敗走、新田軍は伊豆国府まで向かう	手越河原の合戦。敗走した直義軍、箱根水呑に要害を構える
12/8		尊氏軍、鎌倉出発
12/10		尊氏軍、足柄峠に陣を取る
12/11	尊氏軍が竹之下、直義軍が箱根に向かうことを決定する	尊氏軍、藍沢原で尊良親王・脇屋義助軍を破る
12/12	明け方、尊氏軍が鎌倉出発。辰の刻、新田軍は尊良親王・脇屋義助を竹之下へ、義貞を箱根に向ける。午の刻、合戦開始	佐野山の合戦。大友貞載らの寝返りで尊氏軍勝利。夜雨、尊氏軍伊豆国府を見下ろす山野に陣を取る
12/13	箱根の新田軍、竹之下での敗北を聞き総崩れ。義貞軍、伊豆府中・黄瀬川・浮島原で戦いながら西進	尊氏軍、箱根からの敗走軍と伊豆国府で合戦。尊氏軍・直義軍合流し、府中・車返・浮島原に陣を取る
12/14	義貞軍、暮れに天竜川の東の宿に到着	尊氏・直義、鎌倉に戻り関東を固めるか、西進して京都を掌握するかを検討
12/15		足利軍、京都に向けて出発

〈表1〉は『太平記』『梅松論』にみえる箱根・竹之下の戦い前後の様子をまとめたものである。これにより、次のような記述の違いに気がつく。

- 1) 新田軍を迎え撃つために直義（尊氏の弟）軍が鎌倉を出立した日時を、『太平記』は11月20日とするのに対し、『梅松論』は12月2日としている。
- 2) 『太平記』では手越河原（静岡市）の合戦後に直義軍が鎌倉まで敗走したとするのに対し、『梅松論』では箱根にとどまったとしている。
- 3) 尊氏軍が竹之下に向けて鎌倉を出立した日時を、『太平記』は12月12日とするのに対し、『梅松論』は12月8日としている。

4) 竹之下の戦いが始まった日時を、『太平記』は12月12日とするのに対し、『梅松論』は12月11日としている。

では、どちらの記述が信頼に足るのだろうか。実は、断片的ではあるが軍記物語よりはるかに信頼性の高い史料が存在している。それはこれらの合戦に参加した武士たちの軍忠状である。軍忠状とは、後日の恩賞給付の際の証拠とするため、合戦における軍忠を尽くした状況や、自身および従者の負傷、戦死などを申告し、確認してもらうための文書のことである。〈史料1〉は、1337（建武4）年8月に申告された「野本鶴寿丸軍忠状」の一部である。

この軍忠状によれば、野本鶴寿丸の父朝行が尊氏とともに鎌倉を出発したのが12月8日で、12月11日に愛（藍）沢原で合戦を行っていることがわかる。地名としての藍沢原は『吾妻鏡』にも度々あらわれ（初見は1185（文治元）年2月16日条）、小山町から裾野市にかけての地域に比定される。すると尊氏が鎌倉を出発した日時や竹之下の戦いが開始された日時は『梅松論』の方が正しいということになる。

〔史料1〕  
〔前略〕  
一 去建武二年十二月八日、將軍鎌倉御立之間、朝行御共、同十一日、於伊豆國愛沢原合戦之時、最初馳向、懸先致合戦之忠畢、〔中略〕  
一 同十二日、同國佐野河合戦之時、自中手渡河、致軍忠畢、同十三日、伊豆國府合戦之時、中間平五郎男令打死畢、〔後略〕  
〔静岡県史〕資料編6中世2 86頁

### 3 合戦の意義

さて、手越河原敗戦後の直義軍の動きであるが、これは『梅松論』の記述通り箱根に踏みとどまるとみるべきであろう。なぜなら、関東の最重要防衛拠点は箱根峠と足柄峠であり、ここを抑えなければ、新田軍はやすやすと関東に入ってしまうのである（図1）。『太平記』では、鎌倉に敗走した直義軍を追撃せず、伊豆国府（三島市）に兵を逗留させて勝機を逃した義貞を「天運トハ云ナガラ、薄情（「情けない」の意）カリシ事共ナリ」と非難している。だが、おそらく真相は、要害の地箱根に立て籠もる直義軍を簡単には落とせないと考えた義貞が、自軍を立て直す意味で

〈図1〉竹之下の合戦関係地図



〔小山町史〕第6巻 426頁より

いったん三島の地に逗留したのであろう。もちろん、直義のいる箱根を無視して足柄峠経由で鎌倉に向かえば、新田軍は尊氏と直義の軍に挟み撃ちになることになる。義貞は慎重になりすぎたのであろうか。それとも連戦連勝で油断をしてしまったのであろうか。ともかく、この義貞の決断が足利軍に反撃する時間的余裕を与えてしまったのである。『梅松論』によれば、直義の敗北を聞いた尊氏は「守殿（直義）命を落とされは我ありても無益なり」といって出陣を決意するのである。

合戦は3日間続いた。11日が藍沢原での戦い、12日が佐野山（裾野市から三島市北部）での戦い、そして13日が伊豆国府での戦いである。さらに他の軍忠状からも確認できることなのだが、箱根では11日・12日の2日間にわたって合戦が行われた。『太平記』はこの一連の戦いを「箱根竹下合戦」と名づけている。これに勝利した尊氏は上洛し、いったん九州に落ち延びるも再び勢力を回復して京都を奪回し、足利政権を樹立させていく。この意味では、箱根・竹之下の戦いは室町幕府成立の端緒となった合戦である。

〈参考文献〉

『小山町史』第六巻 原始古代中世通史編 第11章第1, 2節